

会 議 錄

会議名	第3回山陽小野田市 地域福祉計画・地域福祉活動計画推進委員会
開催日時	令和7年11月25日(火) 14時00分～15時45分
開催場所	山陽小野田市民館 第1講義室
出席者 (12名)	九州大学大学院人間環境学研究院 教授 高野 和良 高泊地区地区運営協議会 副会長 磯部 吉秀 埴生地区社会福祉協議会 会長 五十嵐 章彦 山陽ボランティア連絡協議会 委員 岡村 博美 福祉員の会(高泊地区福祉員の会会長) 篠原 明子 山陽小野田市自治会連合会 次席副会長 千々松 正俊 山陽小野田市社会福祉事業団みつば園園長 元永 宜徳 山陽小野田市障害者協議会 会長 宮川 力雄 山陽小野田市母子父子寡婦福祉連合会 副会長 中林 昭子 山陽小野田市母子保健推進協議会 会長 高木 理代 山陽小野田市食生活改善推進協議会 理事 正村 幸子 公募委員 田中 絹枝
欠席者 (4名)	山陽小野田市民生児童委員協議会 会長 森川 繁夫 山陽小野田市子ども・子育て協議会 委員 加藤 善成 山陽小野田市老人クラブ連合会 会長 石原 克宏 公募委員 山岡 好弘
事務担当課 及び職員	福祉部長 尾山 貴子 福祉部次長兼子育て支援課長 石田 恵子 福祉部次長兼高齢福祉課長 田尾 忠久 社会福祉課長 和田 英樹 社会福祉課主幹 道元 健太郎 社会福祉課係長 田邊 浩巳

	社会福祉課主任主事 渡壁 昂也
	山陽小野田市社会福祉協議会 常務理事 吉岡 忠司 山陽小野田市社会福祉協議会 事務局長 光永 仁 山陽小野田市社会福祉協議会 事務局次長兼地域福祉課 長 吉岡 智代 山陽小野田市社会福祉協議会地域福祉課長補佐 濱口 美砂
会議次第	<ol style="list-style-type: none"> 1 開会 2 委員長あいさつ 3 議事 <ul style="list-style-type: none"> (1) 第三次地域福祉計画・地域福祉活動計画策定の進捗状況について (2) 関係団体へのヒアリング及び市民アンケート結果について (3) 第三次地域福祉計画・地域福祉活動計画素案について (4) 今後のスケジュールについて
会議結果	<p>○ 3について</p> <p>(1) 第三次地域福祉計画・地域福祉活動計画策定の進捗状況について 事務局が説明を行った。</p> <p>(2) 関係団体へのヒアリング及び市民アンケート結果について 事務局が説明を行った。</p> <p>○質疑応答 質疑応答は次のとおり。</p> <p>委員：市民アンケートについて、年齢ごとの分析はできていると思う。地域特性がアンケート結果だけではわからない。地域特性を計画にどう反映させて</p>

いくかが課題である。問14の満足度の設問で買い物などの便利さが58.8%となっている。地域の会合では、買い物の利便性や医療難民、公共交通機関の話になる。アンケート結果の満足度では普通以上の満足度となっている。結果としてはそうであるが、地域特性があるので、今後の展開の中でそれを踏まえた方が良いのではないか。

委員：福祉員として百歳体操をしているが、年々人数が減っていき少人数でやっている。なり手・担い手がいないのが課題となっている。

委員：地区運営協議会で活動している人は80代が多い。アンケート結果でも60代以上の回答が多数となっている。高齢者の回答が多いので、回答としても高齢者の意見に偏った回答となっている。地区運営協議会が立ち上がって1年なので、どの地区もどのように運営していくか悩んでいる。どの事業、団体でも若い人が入らない。共通の課題である。若い人の力を借りながら、みんなで協力していかなければ百歳体操なども継続が難しい。

委員長：百歳体操をする中で高齢化が進み、なり手・担い手が減り、思いがあってもなかなかできないという現実がある。それをどう捉え、具体化していくのか。計画の素案の議論の中で事務局からご説明いただきたい。

委員：市民アンケートの回収率が30.8%となっているがこれは妥当な数字であるか。

委員長：社会調査の教科書では、郵送調査の回収率は30%～40%と低くなってしまう傾向にある。自由

記述回答の中で、WEB回答方式にしたことが良かったという意見があった。アンケートの方法を工夫し、少しでも回収率があがる工夫はしていかなければならない。若い方の意見が少ないという結果となり、そのあたりを団体活動アンケート等で補足していくことになっていくと思う。

事務局：総合計画のアンケートの回収率は32.7%、第二次計画策定に向けたアンケートは40.8%、第一次の計画策定に向けたアンケートは32.8%であった。今回の30.8%は決して高い数字ではないが妥当な回収率と考えている。

委員：アンケート結果から計画に地域特性を見出すのは難しいと思う。この推進委員会の中で地域特性があるということを認識していけば良いと思う。私が以前自治会の盆祭り等の行事をした際に、自治会単独では先がないので、地域を巻き込んだ方法で行事を行っている。市内の中学校でボランティアクラブを作っているところがある。地域の中学校と連携し行事に参加してもらった事例がある。若い力を借りるひとつのヒントになったと考えている。

(3) 第三次地域福祉計画・地域福祉活動計画素案について

事務局が説明を行った。

委員長：事務局からの説明で、第二次地域福祉計画・地域福祉活動計画の枠組みを基本的には踏襲し、近年の政策的な変化を踏まえた内容に修正して作成するという説明であったが、方向性はそれでよいか御意見をいただきたい。

委員：意見なし。

○質疑応答

質疑応答は次のとおり。

委員長：アンケート結果の議論の中で、「地域活動の参加者の固定化」や「自治会の高齢化」などの課題があつたが、それをどう具現化していくかなど、事務局としての意見を。

事務局：素案の中で地域福祉の課題としてP28（3）地域福祉の担い手の確保を挙げている。その部分がご意見のあった「参加者の固定化」など地域福祉の担い手についての課題となっている。それに対する基本目標や施策として、基本目標1（P39～）がある。これらの取組を行うことで課題の解消ができるように取り組んでまいりたい。

委員：母子父子寡婦福祉連合会も高齢化が進んでいる。社協と連携をとりながら地域の人との交流を求めて「こども食堂」の手伝いをしている。

委員：今の時代として、団体が何かをする、市社協が何かをする、市が何かをするというようなそれぞれが別でやるのは成り立たない社会になっている。高齢化は共通の課題で、若い人たちに地域の問題を一緒にになって考えてもらい将来に繋げていくことが必要。市としては、RMOなどそれぞれの団体がやったことをまとめて、地域全体で考えていく必要がある。地域住民の横の繋がりの手助けを行政にはしてもらいたい。若い世代とともに計画を育てていくことが大切であり、中期的な展望で社会を作っていくことが必要。

委員長：「連携」や「協働」を施策の中にどう取り込んで

いけば良いか御意見いただきたい。

委員：この計画の当事者は私たちであるので、「地域の中でのつながりを作る場」、「参加の機会」を作っていくことを考える必要がある。

福祉をやってくださる方は募集をかけてもなかなか集まらない。ボランティアなど何らかのきっかけで若い世代を育てていき、その親世代も同時に巻き込んでいければ。また、アンケートの中で、地域の民生委員を知らない人が半分もいる。困ったときに相談できる、助けを求められる存在である民生委員を知ってもらうことが大切。知ってもらうことで民生委員さんの活動のしやすさにもつながるのでは。

委員：私自身、民生委員を務めている。民生委員の役割が多岐にわたり、なり手がいない状況。

私の自治会の夏祭りは実行委員会形式で行っており、育友会や子供会などの若い人に参加してもらっている。若い人の参加があることで活気ある夏祭りが開催できている。敬老会も高校生や中学生に手伝ってもらっている。

食生活改善推進員としていきいきサロンや百歳体操を行っている。参加したがらない高齢者が一定数いる。そういう方がどうすれば参加してもらえるのかということに尽力している。

委員長：住民や地域の気持ちを受け止めてもらえる場や環境を行政・社協で具体的な道筋を含めて考えていただきたい。

副委員長：基本理念や基本目標 5 の中で「我が事」というワードが出てくる。我が事としての主体的で積極的な姿勢は地区運営協議会の活動と一致してい

る。今年度から地区運営協議会の本格的な活動がスタートした。それぞれの地区の課題抽出は既にされており、課題解決に向けた取り組みも進めていると思う。

児童生徒について、地域に興味をもってもらうには学校に対してお願いする方法が有効と感じている。車いすや手話の体験をしてもらい、地域福祉の理解を深めていくことから始めたら良いのではないか。

委員：百歳体操を友達と少人数でやっている。友達単位でこういった活動を始めていくことも地域づくりにつながっていると思う。また、各地域の情報をSNSを使って発信していくことも地域づくりにつながっていくのでは。若い人はSNSの使い方を理解しているので、若い人の力を借りながら、それが交流にもつながっていくのでは。

委員長：今日いただいた御意見として、活動への思いを持っている方の「場」や地域の中でのつながりを作る「場」を作ること。また、「連携」、「協働」を意識した施策を検討いただきたい。

事務局：本日いただいた御意見、「場づくり」、「連携」、「協働」をどう計画に反映させていくか一旦持ち帰り検討させていただき、次回推進委員会で御確認いただきたい。

(4) 今後のスケジュールについて
事務局が説明を行った。